



ドイツ・ハンブルク音楽大学におけるリゲティ・コングレスの前の一時

---

## 師・リゲティの思い出

たかの舞俐 (作曲家・フェリス女学院大学准教授)

Text by Mari Takano

---

### リゲティとの出会い

初めてジェルジ・リゲティの姿を見たのは、1984年のドナウエッシンゲン現代音楽週間のときだった。一人で歩いていたりゲティは人から声をかけられたが、軽く会釈して立ち去ったから、「孤独な人なのだな」と思った。そのときにはリゲティに師事するとは夢にも思っていなかった。しかし当時、ドイツの大学で師事する作曲家を探していた私は、ハンブルク音楽大学のリゲティの作曲クラスに籍を置いていた知人を頼って未来の師に手紙と作品を送ることになった。リゲティは私がまだ日本にいたときに書いた作品《Duende》を「この作品ゆえに、あなたは高い水準に達することができると思う」と評価して、音大の受験を勧めてくれた。

### リゲティのレッスン

1986年から私はハンブルク音大でリゲティに作曲を師事することになった。レッスンは週1回、リゲティのアパートメントでクラスの全生徒を集めて行われた。午後3時くらいから参加する生徒が集まってきて、パンやチーズ、サラミなどの簡単な食事をはさんで、真夜中近くに終わることもあった。レッスンはとても厳しかった。「ここをこうしたらいい」などの初歩的なアドバイスは決して行わず、各自のオリジナリティの追及とその実現に向けた、高度なプロフェッショナル性とHandwerk(手仕事、熟練した職人的技術)を磨くことを繰り返し強調した。少しでも聞いたことのあるようなスタイルの作品は、「すでに使い古された」「楽譜は立派に見えるが、すべ

て飾りで意味がない。立派に見えるのに、靴ひもの結ばれていない靴のようだ」と突き返し、独自のアイデアがあっても本当の意味でプロフェッショナルでないものも容赦なく批判した。作曲についての厳しい態度はリゲティの創作姿勢そのものでもあった。

あるとき「楽譜は立派に見えるけれど、本当は全然プロフェッショナルにできていない」と酷評された生徒が激怒して、「どこがそうなのか」と問いただすと、リゲティは「例えばここここだ」とすぐにスコアを指差して言ったのは印象的だった。この生徒は2度とクラスに現れなかった。

レッスンでのリゲティの批評はとても辛辣だったから、生徒はよほどの確信のない限り自作品を持っていかなかった。そのためリゲティはときどき作曲中の自作品を生徒に見せて批評を求めた。ある日、リゲティは作曲が終わったばかりの《ピアノ協奏曲》を皆に見せて意見を求めた。

男子学生たちは何かしら気の付いたことを交えながら、ポジティブな意見を述べた。当時の私はこの作品を特に良いとは思っていなかった。不届きにも、旋法的な響きとバルトークのようなリズムばかりで体操の音楽みたい、などと感じていて、リゲティの意図がよくわからなかった(今考えれば、それは演奏のせいだったように思う)。私はリゲティに背を向けて椅子に座り、表情を気取られないようにしていた。



リゲティが生徒を集めてレッスンをしていたアパートメント。裏の方に面しており、アルスター川を見下ろす部屋でした。



この橋の上でぼんやりしていたリゲティと偶然あった事があります。作曲の途中で、散歩にでたようです。

ところがリゲティは突然「女性にも聞いてみよう」と言って私を指名した。リゲティはとても勘の鋭い人だったから、私の背中に何かを読み取ったのだろう。リゲティの方を振り向いた私は——今思い出してみても身の毛がよだつのだけれど——「この協奏曲は、第1楽章のリズムや第2楽章でオカリナなどを使って、今までにない響きを試みてはいるけれど、結局、音楽の構造は先生の作品によく見られる、ピアノかオーケストラの音域が徐々に極度に上行、あるいは下行していき、頂点に達すると次の部分へ移るというパターンから抜け出していない」と言ってしまったのだ。しかしリゲティは怒りもしなければ感情的にもならず、とても素直に「そうかもしれない」と言った。リゲティは人の率直な意見には驚くほどオープンだった。

### リゲティの遺したもの

リゲティの思い出は尽きないが、すべては遠い過去となった。2005年、東京に生活の拠点を置いた私は日々の暮らしに追われ、リゲティのことをほとんど考えなくなった。しかしある秋の夜、突然リゲティの夢を見た。あまりにも記憶にはっきりと残る生々しい夢だったので、私はすぐにリゲティの秘書に電話をかけて夢の内容を話した。すると秘書はリゲティが深刻な病に冒されていると話し、その状況は私の夢にかなり近いものでもあった。その後も何度か夢にリゲティが現れた。翌2006年6月に訃報を聞いたときには、呆然として身体の力が抜けた。

## 師・リゲティの思い出

会うことはなくても、どこかにいてくれれば——自分がいかにリゲティを心の支えにしていたのか改めて気づかされた。

2001年に行われたインタビューでは「私の足はもはや新鮮ではないけれど、私の脳はどうだろう？ まだ大丈夫なことを祈る」と話している。ところがそのあとすぐにものを書く事もできなくなったそうだ。《ハンブルク協奏曲》はリゲティの音楽の真髓が率直に、裸のまま現れているように思われる。第4楽章の中ほどで始まる、空から光輝くものが下界へと降りてくるように響くヴァイオリン、シロフォン、ピッコロ、フルートが重なっていく部分は、病気が次第にリゲティの身体を蝕んでいくように聞こえもする。優れた作曲家は、自身の未来をも音で予知できるのかもしれない。

リゲティの生涯は波乱に満ちていた。リゲティはそれらについて、基本的にほとんど話す事はなかったが、時折ふと語ることがあった。第2次世界大戦中、強制労働所に入れられていたとき、毎朝行進をしなければならないのに身体が言うことを効かなくなった。殺されてもいいと思っただけに行かないでいると、終戦の知らせを聞いたという話、ハンガリーから亡命するとき、銃撃を避けるために国境の沼地を何時間も地面を這いつくばってオーストリアの国境にたどり着いたこと、無国籍で無職だった亡命当初は食べるものがなく、スーパーで買った酢漬けの魚1パックが一日の食事だったこと。

身をもって苦勞を体験したリゲティは、経済的に困窮した知人には援助を惜しまなかった。私もドイツで職がなく困っていたとき、リゲティに助けてもらったことがある。仕事が決まってリゲティにまず半額返すと、「残りは返さなくて良い。困っている人や友人のために使いなさい」と言われた。四半世紀以上経った今も、その日

のリゲティの表情と、窓から見えた木々と日の光を昨日のようによく覚えている。渡せなかった残りは、今も様々な形で返っていつている。

人間誰もが歳をとり、いつかは世を去っていく。しかし、リゲティのような大きな人間の存在は、バトンのように他の人々を通じて受け継がれて残っていくものだ。それはエピソードからだけではなく、遺された作品からも感じることが出来る。リゲティは人生も謳歌してはいたけれど、富や名声のために作曲を行ったわけでは決してなかった。死の瀬戸際に何度も立たされながらその都度生きながらえた経験を通じて、自身が真に望んで納得できる作品だけを作曲するという創作への姿勢が培われたのだろう。《ヴァイオリン協奏曲》第2楽章の旋律は、当時の現代音楽のなかではあまりに旋律的に聞こえたかもしれない。しかしリゲティは自分の信じたことを恐れなかった。その信念は作品の聞き手のなかにも残されていき、時代を超えていく。

今日コンサートに来られた聞き手のなかには、現代音楽を、リゲティの作品を聴くのは初めてという方もあるいはおられるかもしれない。これまで聞いたことのない響きの世界にも、たとえそれがどんなに複雑で錯綜したものであっても、本物の大作曲家の音楽からは何かしら真の力を感じ取ることができると確信している。



ドイツ・ハンブルク音楽大学において《ボエム・サンフォニック》の演奏準備。自分でメトロノームを並べていました。